

## 解答

問一 生まれていない

問二 子のため孫のためを考えることが、自分の家系を守りたいという個人的なものにすぎず、他者や人類全体のことを考えていいないから。

問三 热帯雨林の伐採や魚の乱獲、化石燃料をふんだんに使用したエネルギー開発、快適さを優先させて自然景観を大切にしない都市計画、借金を増やし続ける国家予算など、現代の私たちの暮らしぶりからすると、二百年先を見通したバランスのとれた計画を立てるとは困難だということ。

問四 地球上すべての生命体は、最初に発生したひとつの単細胞から受け継がれたもので、われわれは「生命」に連帯しているといえる。したがって、人の生活と意識が「ヒト」という種の中だけで完結してはならず、すべての生命を思いやらなければならないのだ。

問五 ① 義務 ② 類推 ③ 座標 ④ 許容 ⑤ 尺度

二

問一 仲間が必要だということです

問二 自分も仲間と同じようにびたいという気持ちはあるが、勇気がなく、こわくてとべない。そんな現実や不安から目をそむけ、自分はうつくしい特別な存在だと思いこむことで平静さを保とうとしている。

問三 ぶかっこうなチドリからいっしょに行こうとさせられ、内心はうれしかったが、自分が空をとべないため断るしかなかった。自分としても不本意な理由で断つたことで申し訳ないと思い、ふがいない自分を責めている。

問四 仲間が去り、カニやトンビに自分のみじめな姿を意識させられるなかで、「べっぴんさん」は不安をつのらせていた。そんなとき、親身になって心配してくれる「ぶかっこうなチドリ」に出会い、少しずつ心を開くが、飛ぶ勇気を出せずに一度はあきらめかけた。しかし、彼といよいよ別れるというとき、「べっぴんさん」はもう一度とぶことにチャレンジした。仲間の助けを借りたことで勇気と自信が生まれ、とぶことができたのである。

## 解説

一

問一 「まだ（A）者たちも含めて」という部分の直前・直後から内容を判断します。直前「その票は自分（＝命を生きる私）だけではなく」、直後「以後の七世代のための一票」より、Aの者は「以後の七世代」に含まれることがわかります。このあとには「遠い未来の子」という表現もあり、「まだ生まれていない者たち」だとわかります。

問二 「それ」は直前の文「子のため孫のためを考えること」を指しています。これが設問の「何が」にあたります。では、子のため孫のためを考えることがなぜ利己的だといえるのか？「子のため孫のため」というのは、自分の身近な家族・家系を守りたいという個人的なものにすぎません。第三者や人類全体のことなど、利他的な考えが求められていないのです。

問三 文頭「七世代後のこと」を真剣に考えるなら」という条件部分に注目します。真剣に考えると――線部「たちまち重い沈黙が強いられる」のです。200年先を見通したバランスのとれた計画を立てる「＝七世代後のこと」を真剣に考える「ことは困難だ」「重い沈黙」ということを表しています。これに具体例を加えます。――線部直前に「①農林水産業にしても、②工業の各分野にしても、③都市計画にしても、④消費の全般的体制にしても」とあり、①～④について具体例を取り上げればよいでしょう。

問四 「そのこと」は、前段落からの内容を受けています。地球上すべての生命体は、最初に発生したひとつの単細胞から受け継がれてきた「＝生命の連帯」。したがって、人の生活と意識が「ヒト」という種の中だけで完結してはいけないので筆者は主張しています。あらゆる生物のもとをたどれば、ひとつの単細胞に行き着く。だからこそ、すべての生命を思いやらなければならないのです。このことをしつかり理解すべきだ、という思いを「痛切な自覚」と表現しています。

問一 この日の「ぶかっこうなチドリ」のセリフから読み取ります。

①「ひとりは、さびしいでしょ？」

②「ぼくたちは、草原に立つ一本の大木じゃありません」

①のセリフでは、自分一人ではダメで、仲間が必要だということを、やんわりと伝えています。②では、自分だけではダメだということを、よりきつぱりと述べています。それでも「べっぴんさんのチドリ」が「どういう意味かしら」とたずねてきたため、はつきりと伝える表現にします。「一人ではダメだ、仲間が必要だ、という内容で解答を組み立てましょう。

問二 これより前の部分で、「べっぴんさん」が小馬鹿にされている様子から考えます。「相手はなぜか笑いをこらえたようになさります」「相手は思い出したようにいいます。「ああ、でも、むりだね。べっぴんさんは、ここにのこのだからね」……この二カ所において、「べっぴんさん」のどういうことをからかっているのでしょうか？ 文章全体を読むと、後半部分から「べっぴんさん」は空を飛べないことがわかります。この二カ所で「べっぴんさん」は（鳥のくせに）空を飛べないことを冷やかしているのです。そのとき、「べっぴんさん」は、「そういうとき、わたしは返事をしません」「いつさい、わたしは気にいたしません」と無理に意識しない様子を見せています。飛びたくても飛べない自分のふがいなさを指摘されることから逃げ、潮だまりに映った自分の姿にほれぼれすることで、心の平静さを保とうとしているのです。

問三 「ぶかっこうなチドリ」にいっしょに行こうと言われ、「べっぴんさん」は喜びました。直前の部分で「ぶかっこうなチドリ」を助けた行動から考えても、まんざらではなかったのです。しかし、空を飛べないという理由から、いっしょに行くとは言えず、悔しいやら情けないやら、自分を責める気持ちも相まってだまりこむばかりだったのです。相手に対する申し訳ない気持ちと、期待に応えられない自分を責める気持ちを解答にまとめましょう。

問四 一線[A]より後の展開をおさえると、「カニ」「トンビ」との場面を経て「ぶかっこうなチドリ」との出合いに至っています。「カニ」とのやりとりではまだ強がりを見せていますが、「トンビ」の場面では、ひとりぼっちの不安が色濃く表れはじめています。

そして、「ぶかっこうなチドリ」とのやりとりのなかで、「べっぴんさん」もいっしょに行けたらいいと考えるようになりましたが、空が飛べないためにいったんあきらめました。しかし、いよいよ「ぶかっこうなチドリ」と別れるというとき、思わず自らとびたとしました。相手の必死の助けを借りることで飛べるようになつたのです。仲間の必要性を認め、助けを借りたことで勇気と自信が生まれた結果、「べっぴんさん」は飛ぶようになったのです。問一の解答内容とも対応してきます。